

# 坂東眞理子副知事と語る21世紀の地方行政



特集

## 市長新春対談



### 市民の誇れるまちづくりをめざして 人の生き方に関わって

**市長** あけましておめでとうございます。

**副知事** おめでとうございます。

**市長** 坂東副知事におかれましては、お忙しい中、このような形でお話ができるのをとても楽しみにしております。どうぞよろしくお願いたします。

**副知事** こちらこそよろしくお願いたします。

**市長** 副知事は東大を卒業後、ハーバード大学に留学し、出版物も多く出され、いろいろな分野で素晴らしい才能を発揮されています。特に得意な分野ということでは…

**副知事** そうですね。私は今まで二、三年ごとにポストが変わりましたが、そのときどきに学んだことは現

在も大変興味深く残っています。まず世論調査担当に始まり、女性問題、消費生活、青少年、高齢者対策…と、人間の生き方に関わるセクションばかりでした。

**市長** そうでしたか。とてもやりがいのあるセクションですね。

**副知事** はい。そして、最近思うのは、現在は20世紀から21世紀への過渡期ですから、今までの社会のしくみ、人の生き方、過ごし方が変わってきているということですね。

**市長** そうですね。私もそう感じます。

**副知事** それらのいろいろな問題の根底は共通しているところが多いですね。たとえば、特に高齢者問題と女性問題が「弱者の問題」として受け

取られていて、ドロップアウトした人や犯罪が多い厳しい世界です。だから、日本はそれを目指すべきではないと思います。

**市長** なるほど。

**副知事** ちょうどそのころ、アメリカのこれまでのやり方を真似るだけではないかという動きや、日本を見直そうという風潮があったので、私も全員参加型の日本のシステムの方がよい点もあると考えていました。でも、しばらくあの国においてその真面目さ、真剣さ、変わらなければという迫力が見えてきたんです。

**市長** つまり、アメリカの活動的な部分ですね。

**副知事** はい。そのころのアメリカには、変える努力とそのため犠牲を払う決意がありました。いいかげんなごまかしや言い訳はなく、変革のバイタリティーがあり、活力がありました。だから「いかげんなことをしていたら、この社会に通用しなくなる。」と思ったのです。そしてアメリカはその努力の結果、見事に再生し、活力を取り戻しました。でも日本はどうかといえ、当時は「世界一の日本」と言われ、自分たちも、みんなそこそこの水準の平和な暮らしと

思っているけれど、今現在、なんとなく活力がなくなっていますよね。「もうどうしようもない。世界の中で我々の成長の時代は終わったんだ。」と諦め気持が強くなっています。

とめられ、一くりにされていたように思います。私はいつも能力や才能、気力があるのにそれが生かせない女性が多く、もったいないと思っていました。60歳を過ぎたかたがたも同じですね。現在、高齢者は人口の15%を占めています。ですから、21世紀は、女性も高齢者もやる気と力のある人には十分に力を発揮してもらわなくてはならないと思うのです。

**市長** そうですね。年齢には関係なく、生き生きと暮らし、働いているかたはたくさんいらっしゃいますね。

### 国際舞台の経験とその影響

**市長** そういったお考えには、国政でいろいろな施策にたずさわったり、海外で社会情勢や問題などを研究・勉強なさったりした経験が大き

いです。この日本の現状は本当によくないなと思います。

**市長** 私も同じように感じていました。彼らは「やるべきことは、やるべき時期にやらなければいけない。」という考え方で、「だれかがやってくれるかもしれない。」とは考えない人びとですね。日本にも、こういう考え方がこれら必要になってくると思うのです。そういった変化を日本国民は望んでいるのではないかと、だからこれからのリーダーは、自分から積極的に変えていこうとする姿勢が必要だと思います。

**副知事** そうですね。

**市長** 土屋知事の今の姿勢というのは、まさにこれだと思えます。「彩の国」という看板掲げて、日本一の素晴らしい県に変えていこうとしています。そういう考えは、知事自身が

もちろん、援助を必要とする人もいらっしゃるのです。必要なかたにはきちんと援助をすべきですが。

**副知事** そうですね。人間を外側のレベルで分けていた荒っぽいやり方は、以前のゆとりのない社会では効果的だったのだと思います。しかしこれからは、もっと多様に、細かい目配りと気配りをした施策でなければいけないと思います。

**市長** まさに今までは、「日本固有」とも言えるような封建的な仕組みが生かされる社会だったのです。しかし現代は、「社会がこのままではどうなるのか」という不安に直面している時期だと思えます。ですから、今すぐに、女性問題も高齢者問題も一挙に取り組む必要がある。どちらか一方を選ぶことはできないし、先送りもできない。つまりどちらも一緒に解決していかなければいけないと思うのです。

**副知事** そのとおりですね。今はまだ、変わるためのエネルギーもありません。しかし、そのエネルギーすら、もたもたしているとなくなってしまおうと思わなくてはなりません。

**市長** 同感ですね。

国際舞台で活躍していたことが大きく影響しているのだらうと思えます。今はまさに、これまでと違ったリーダーシップが大切で、それが求められる時代だと思えます。ですから、その知事を補佐するのが坂東副知事のような考えのかたであることは大変素晴らしいと思えますね。

**副知事** ありがとうございます。そうですね。土屋知事のことをお話ししますと、とてもブレの少ないリーダーだと思えますね。まず大目標をきちんとお出しになる。そして、それをあまり変更しない。そういう点は、リーダーとして大変立派なことだと思えますし、一緒に仕事をしたいと安心して、信頼できますね。

**市長** そうですね。大きな活力を持って地方自治をすすめるうえで、とてもよい環境と言えますね。

埼玉県副知事

## 坂東 眞理子

ばんどうまりこ

- 略歴
- 昭和44年 東京大学卒業、総理府入省
  - 59年 日本学術会議事務局学術情報国際課長
  - 60年 内閣総理大臣官房参事官兼内閣審議官
  - 平成元年 総務庁統計局統計調査部消費統計課長
  - 2年 総務庁統計局統計情報課長
  - 5年 総理府婦人問題担当室長
  - 6年 内閣総理大臣官房男女共同参画室長
  - 7年 埼玉県副知事 現在に至る
- 【著書等】総理府時代には昭和53年に国内初の婦人白書を手掛けたのをはじめ、菅原眞理子のペンネームで「ニューシルバーの誕生」「変わる消費社会」「米国きりあうーまん事情」「新・家族の時代」など多数執筆。